

十二張石像

特選 名著複刻全集 近代文学館

昭和46年5月1日 印刷

昭和46年5月10日 発行

湯浅半月著

十二の石塚

自家版

刊 行 財団法人 日 本 近 代 文 学 館

東京都目黒区駒場4-3-55

代表者 塩 田 良 平

編 集 特選名著複刻全集近代文学館・編集委員会

代表者 稲 垣 達 郎

総発売元 株式会社 図 書 月 販

東京都新宿区市ヶ谷本村町35 千代田ビル

代表者 中 森 蔭 人

製 作 株式会社 ほ る ぶ 出 版

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 荒 井 正 大

東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 長 尾 義 輝

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

序

智識道德ハ言語ノ氣骨文學ノ神髓ナリ支那古今ノ文學ヲ歴覽シ
テ其盛衰ノ理ヲ究メ本邦文學ト稱スルモノハ沿革ヲ考ヘテ其ノ
消長ノ本ヲ推ストキハ容易ニ此ノ言ノ正當ナルヲ知ラン近ク我
國ニ現ハレタル事實ニ往昔支那文學証センニ往昔支那文學ノ渡
來シテ闔國ニ行ハレズト思フノ感覺便ナラズト思フノ感覺ハ當
時猶水羅馬字ノ行ハラズ之レカ爲ニ異ナラズ之レカ爲ニ純乎
タル漢文ハ漸ヤク一事記日本記三代實
如キ其例ナリト漢文古事記日本記三代實
錄ノ如キ其例ナリトナリ
更ニ進化(真正ノ進
化ナリ)シテ日本ノ人心支タリ是レ日本ノ人心支那文
學ニ叛キテ已レニ便利モノハ沿革ヲ立ヲ企テタル者ニ非スヤ然
レトモ其成績見ルニ足ルヘキモノ無ク荏苒歲月ヲ經過シテ今日
ニ至リ氣骨神髓共ニ強勁ナル西國文學ノ刺衝スルニ依リ此ニ始

メテ支那文字廢棄ノ運ニ向ヘリト云ハサルヲ得ズ其然ル所以ノ
者ハ蓋シ當時ノ和文ハ數箇ノ原因アリシカ爲メ堂々タル道德ノ
精神ニ乏シク浮華艷麗淺弱ヲ尊ヒテ自ラ女文字ト稱セラル、ノ
地位ニ安ンゼリ如何ニシテ彼ノ勁健正大ナル風ノ稍備ハレル支
那文學ニ抗敵スルヲ得ンヤ單リ通常ノ文章然ルニ非ズ所謂和
歌ナルモノモ同一ノ弊ニ陷レルモノト云ハザルベカラズ太古素
盞鳴尊カ出雲八重垣ノ歌ヲ賦セシヨリ家持ノ萬葉集ヲ撰ムニ至
リ又其ヨリ世々ノ敕撰ニ成レル歌集ヲ統觀スルニ間々忠君愛國
ノ情ヲ詠シ父子兄弟夫婦ノ際ニ起レル德義上ノ感覺ヲ述フルモ
ノ無キニアラチド實ニ曉天ノ星ノ如ク寥々幾許モナシ萬葉集ノ
如キハ素直ニソ見ルヘキモノナキニアラチド上ニ云ヘルカ如キ
非難ハ到底免ルヘカラズ況ンヤ其レヨリ降りテ后ハ唯風流ヲ事

トシ美妙ヲ專ラトシ風容色澤ヲ貴フ其弊ヤ淫艶刻飾佻巧小碎ノ
体ヲ成シ纖細見ルニ堪ヘサルナリ抑詩歌ハ心ノ花愛情ノ言語ナ
リ余曾テ古今ノ和歌ヲ取リテ其意義ヲ檢セ^ルニ春曙秋月露花霜
雪ヲ愛シ^モ世ノ變故ヲ悼ムノ詞若シクハ閨情ヲ述フルノ句多ク
シテ或ハ其艷麗愛スベク或ハ其情致憐レムベク或ハ其微妙ヲ愛
スルノ細カナル殆ト我レヲシテ泣カシムルモノアリト雖社會ノ
困厄ヲ憂ヘ人類ノ苦禍ヲ哀シム志士仁人ノ語何所ニカアル人性
ノ高尚ナル部分ニ訴ヘ私ヲ排シ公ヲ翼襄シテ人心ヲ救ヒ絶大ノ
眞理ヲ美妙高遠ノ詞花ニ飾リテ示スモノ何所ニカアル我レ未タ
之レアルヲ見サルナリ是ヲ以テ觀レハ日本ノ詠歌ハ心ニ本キ愛
情ヲ種トセシモノニハアレト其心モ愛モ未タ高尚ノ位置ニ至ラ
サルモノト云ベシ唐ノ樂天微元九ニ與フルノ書ニ云ク自^レ登^レ朝來^コ

年齒漸長閱^レ事多與^レ人言多詢^ニ事務^ニ每^レ讀^ニ書史^ニ多求^ニ理道^ニ始知文章合^ニ
 爲^レ時而著^ニ歌詩合^ニ爲事而作^ニ杜子美蘇東坡等凡^ソ彼國^ニ於^テ詞
 宗タルモノ、所見概^テ此ノ如^シ然^レ我歷朝ノ歌人中此ノ如^キ精
 神アルモノヲ見ル能ハズ豈慨嘆ニ堪フベケンヤ此ノ精神ノ乏シ
 キヨリ起レル歌詩ノ弊枚舉ニ遑アラズ其薄弱ニシテ世ニ重セラ
 レズ風人騷客ノ玩具タリシ原因此ニ在リテ存ス妄リニ古雅ヲ貴
 ヒ民俗ヲ蔑視シ詩歌ヲノ特ニ社會ノ一小局部ニノミ行ハレシメ
 タルモ之レニ職由スト云ハズンバ非ズ此ノ他我國近古ノ詠作論
 スヘキモノ多シト雖一小冊子ノ序言ニ盡スヘキニアラチハ略ス
 今ヤ百度更革ノ際文學ノ氣運漸ヤク一變セントスルニ當リ學者
 往々詠歌ノ事ニ注目シ議論稍喧シカラントス然^レ或ハ美妙ヲ
 棄テ、鄙俗ニ流ル倨然新詩体ト稱スルモノ、如^キ是レナリ或ハ

鄙俗ヲ厭ヒテ古雅ニ過キ博學ノ人ニ非サレハ童謠ヲモ解シ難カ
ラシメントス俗歌改良家ト稱スルモノ是ナリ論者或ハ官ニ依リ
テ詩歌ヲ改良シ官ニ依リテ詩人ヲ揆造セントス其妄想此ニ至リ
テ極マレリト云フベシ斯ル有様ニテハ詠詩ノ改良望ムヘキニ非
ズ然ラハ之ヲ如何ニセハ可ナラン乎曰ク詩ノ別才ヲ具ヘタルモ
ノ出テ、廣ク和漢泰西ノ詩ヲ學ヒテ一家新創ノ詩体ヲ成シテ世
ヲ風靡スルニ在リ泰西諸國ニ於テ詩作ノ變遷多クハ傑然タル一
個人ノ變体ヨリ生ス吾邦詩學上今日ノ急要ハ一家新創ノ詩人ノ
現ハレ出ルコナルベシ

友人湯淺吉郎氏頃日長篇ノ歌ヲ詠シ目ケテ十二之石塚ト云フユ
ダヤノ故事ヲ叙述セルモノニシテ日本ニハ未タ其類ヲ見サル史
詩ナリ其体制新創ナルノミナラズ道德ノ感覺ヲ含ミ愛國正義ノ

氣ヲ吹鼓シ讀者ヲシテ感動ニ堪ヘサラシメントス余ハ今日ノ如キ茫々タル詠詩ノ沙漠ニ此作アルヲ見テ欣喜措ク能ハサルヲ覺ユ嗚呼此詩固トヨリ非難スヘキ所ナキニ非ズ然レモ吾邦ニ在リテハ空前ノ作ナリ新創ノ事業豈疵暇ナキヲ得ン余此篇ノ著者ヲ見ルニ所謂詩才ニ富メル人ナランカ望ムラクハ尙發憤厲精シテ思想ヲ煉リ詩情ヲ養ヒテ世ヲ風靡スル一家新創ノ詩人トナラレヨ

老杜曰讀書破萬卷下筆如有神ト蓋シ詩ハ別才アリト雖其培養ヲ要スルコト此ノ如シ湯淺氏ハ明日發程シテ米國ニ留學セラレントス其ノ彼地ニ在ルヤ望ムラクハ西詩ノ蘊奧ヲ探リ名人文士ニ叩キテ其妙處ニ造詣シ句ヲ煉リ章ヲ鍛ヒテ今十二之石塚ニ開カレタル端緒ヲ繼ギテ日本ノ詩歌ヲ一變シ余ヲシテ其大成ヲ祝スル

ノ喜ヲナサシメヨ嗚呼天父願ハクハ水陸共ニ此人ヲ保護シ留學
ノ間其心身ヲ依助シ事業ヲ成シテ故國ニ歸リ主ノ聖榮ヲ輝カシ
メ給ヘ亞孟

明治十八年九月

植村正久識

十二の石塚

一回緒言

和歌の浦れ磯崎こゆる
まら浪のしらぬむゐしを
松陰の眞砂にふして
もとむともかひやゐらん

玉津島姫

久ゐたの天つみろのに
むき遊ぶ聖靈の鳩れ
錦翼ふのらしめたまへ
我神よいき行て見む

岩としるヨルダン川の

柳のけ高のやぐくき

のせ立てさとなみ涼し

千尋の青淵あはれ

朝日さすエリコの城れ

高樓もうづもるむあり

椰子の葉のえげるも深し

七里の白壁

千早振神の紀念あるしと

ギルガルの岡べおさける

百合花ゆりの はなれたてても高し

十二の石塚いしづか

荒野^{あれ}の

水枝 さす楓のわの葉
影 見えて池のほとけ^{かみ}の
すゝしさに驢馬引とゞめ
休ふの母おやのあらぬ
ろの子ゐも十二のいしを
ゆひさして誰の記念^{あるし}ず
この何ろの故あらむ
あらま母しゑらしめたまへと
問ひし子の顔えてえまつ
たらちねの母のうれしさ
岩が根の草のみどりに

いすわりてうちたふの
 久方の天地つくる
 神の友とも信あきら仰かうの父
 エブラハムイサクヤコブの
 ひろしよりイスラエルびと
 すみ馴し牧場もあとに
 エジプトの國をしいで
 いおしへのヨセフを知らぬ
 夷等えいどうの軍車ぐんぐるまも
 境太刃もなまりの如く
 紅海かうかいの波お沈めし
 神の僕たねモーセの歌を

うたひあげて打や鼓れ
音高し舞や處女の
花ゐさね袖ふき返し
濱風も涼しくありぬ
夕日影残る椰子の
木ぐくれの岩井くみおど
つとふめり羔野の原に
朝露のどくおき出で
鶉かり「マナ」をあつむる
民草もあひく自由の
風はやみ照らしも果ぬ
稻妻や峯どろろかし

鳴神のエホバの山を
あそどみておどろくまであ
いちしろくめもかゝやきて
雲間よりさすや日影の
のとけくも花野あわろふ
蜂のみつ牛のちゝさへ
野あ岡にあがるゝ國の
わが國と契約^{みちかい}重く
いや高き雲の御柱
行けむゆきかえれば歸り
大御箱神^{おみはこ}のまほく
司びと貝ふきあらし

武士に弓とりもたし
二つらにわかきつらあり
ねりゆけば妻の子を負ひ
老人杖つきたてつ
あくきじといろぎに急ぎ
いろくなりさきむや敵の
山といふ山をばこえて
川といふ川をばわたり
四十歳のなぶき旅路も
えてあたり果おしものを
沙烟またや野嵐
立ちへらんあしき民草

枯きしよりモーセアロンも
空蟬の此世に見えず
ありおけるかる

二回古塚ふるづか

あつかしきカナンの國の
山のすゑ水の行衛いくゑを
とるくどうちあがむきバ
エリコより二人ふたりのつかひ
歸り來て敵の本城ねじろも
ろの路みちもあらきにけりな
唐錦旌旗からにしきひるがへし
雲あして槍やりと槍やりとい